

1. はじめに

(1) 教職大学院に入学した理由

私は「学級づくり」と「授業づくり」に関する理論や実践的な指導力を身につけたいと思い入学を決意した。子どもたちとの距離の取り方、集団をまとめる指導技術、問題を抱える生徒への対応、分かりやすく楽しい授業開発力など、自分に足りない技術を一つでも多く学び、身につけたいと考えた。

また、教職大学院ではサポーター実習や教師力向上実習Ⅰ～Ⅲ、特別課題実習など多くの実習の機会に恵まれていることを知った。座学だけではなく、実習を通して即戦力になれるような力や多角的な視点で物事を考える力を身につけたいと考えた。

(2) 題目設定の理由

戦後約 60 年ぶりに改正された新教育基本法・学校教育法では、学力の重要な 3 要素（基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学習意欲と習慣化等）と伴に、各教科等における「言語活動の充実」が明記された（傍線部は杏名、以下同じ）（注 1）。また、「伝統や文化に関する教育の充実」が示されたことにより、義務教育の目標 10 項目の 1 つに「外国の文化の理解を通じて、他国を尊重する態度の育成」が明示された。

これに伴い、新中学校学習指導要領（外国語編）では、新設された小学校の外国語活動を踏まえた上で『聞くこと』、『話すこと』、『読むこと』、『書くこと』の 4 つの領域のバランスに配慮した言語活動の充実」が示され、教材選定の観点には「伝統文化」が追加された（注 2）。

また、英語科では「内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分ではない」という課題に対応して、一貫した論理で文章を書く力やそれを伝え合う力等の「論理的なコミュニケーション能力」の育成に重点を置いた指導事項が追加された（注 2）。

これらの改訂や課題を踏まえて、「自国と他国の伝統文化」に焦点を当てた授業・学級づくりを中心に、全教科に通ずるような「論理的なコミュニケーション能力」を育成していくことが必要であると考え、本題目を設定した。

2. 「英語科授業開発」で求められることとは

(1) 英語科における「言語活動の充実」

—「考え」を「受信・発信」できるように—

英語科では、4 領域の言語活動をバランスよく計画的・系統的に行うことが求められている。そして

言語活動を充実させるために、各領域とも言語活動の指導事項が追加・改編された。具体的には、「話すこと」では「与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」、「書くこと」では「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと」が加わった（注 2）。また、自分の考えを「発信」するだけでなく、相手の考えを「受信」できるよう、話し手の意図を理解する学習活動（聞くこと）や英語を読んで書き手の意図などを理解する学習活動（読むこと）も追加された。

このことを踏まえて、互いの考えや気持ちを受信・発信できるような、4 領域のバランスがとれた言語活動の充実が必要であると考えた。

(2) 「論理的なコミュニケーション能力」育成

—公的な構成の「型」の学習や文法指導から—

「互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を行うためには、軸となる「論理的なコミュニケーション能力」を育成する必要がある。「論理的なコミュニケーション能力」とは、「相手の立場や状況、背景、思いなどを正確に読み取り、そこから一貫した論理で互いの考えを伝え合う力」であると私は考える。そして、論理的なコミュニケーション能力を育成するためには、全教科・活動・コミュニケーション等に生きる「はじめ・なか・まとめ・むすび」の公的な構成の「型」の学習（注 3）や論理的な認識・思考・発想等に生きる接続詞や副詞等の文法指導を充実させていく必要があると考える。

公的な構成の「型」を学ぶことで、自分の考えや気持ちを一貫して伝えるための「型」を身につけることができる。伝え合う際には、話し手は伝えたい事柄をはっきりさせることができ、聞き手には話し手の意向が伝わりやすくなる。

また、文法はコミュニケーションや論理的な文章を支えるものであり、英語で自分の考えや気持ちなどを相手に正しく伝えることができる。文法の意味や機能を十分に理解させた上で、文法を言語活動の中に生かしていくことが大切である。

このように、論理的なコミュニケーション能力を育成するためには、公的な構成の「型」の学習や文法指導が必要であると考えた。

(3) 英語科における「習得・活用」の授業開発

—到達目標（評価基準）」と「学習過程」の明確化—

論理的なコミュニケーション能力を育成するため

には、具体的に「どんな学力をつけるための言語活動なのか、なにをどう活動・評価させるか＝到達目標（評価基準・規準）」という着地点を教師が明確に持ち、学習の見通しを持つ必要がある。

また、子どもたち全員に「学力保証」（公的結果責任）を果たすためには、「習得」から「活用」への学習過程を明確にすることで、教師にも子どもにも身につけるべき「学力観」が見えるようになる（学びのつまずきの診断と改善に）。基礎・基本的な知識・技能を確実に「習得」させることで、全員にこれらを「活用」して課題を解決するために必要な「思考・判断・表現力等」を育むことができると考える。

このことを踏まえて、「到達目標（評価基準）」や「習得」から「活用」への段階的な学習過程を、英語科授業において明確にしていく必要があると考える。

（4）伝統文化の重視—英語科における位置づけ—

言語は文化や歴史・民族（個人）のアイデンティティーそのもの（固有な存在証明）と見ることができ（注3）。そのため、英語という言語を用いて「論理的なコミュニケーション」を図っていくためには、コミュニケーションの方法や技術、思考・発想の形式（型）を理解するだけでなく、英語という言語の背景にある伝統文化、歴史、感受性などを理解する必要があると考える。

また、私たちは思考する際、母語である日本語を用いる。そのため、異文化理解に加えて、思考の基盤となっている日本語やその背景にある自国の伝統文化についても理解を深めていくことが大切である。国際化・グローバル化する社会の中で、自国の伝統文化を外国の人々に発信できる素養を培うことも求められていると読むことができる。

英語科授業の中でも、「伝統や文化に関する教育」を充実させるためには、異文化理解や自国の伝統文化理解を位置づけていく必要があると考える。

3. 本稿の目的と方法

本稿では「英語科授業開発（中学校）と『論理的なコミュニケーション能力』育成」と題し、「伝統文化の尊重と相互に関連させながら、「論理的なコミュニケーション能力」を育成するための学級・授業づくりを実践的に提案していくものである。

そのため、教職大学院における多くの貴重な実習の中から、特に本テーマに沿って実践を行わせていただいた「教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ」の報告と省察を中心に述べさせていただくことをあらかじめお断りする。

また、本稿は修了報告書でもあるため、①実習における実践の報告と省察、②教職大学院における学びの成果、③今後の抱負等も述べる。

4. ポートフォリオの目次

2年間の学びを『学習の記録』（ポートフォリオ）の

形式でまとめた。以下はその目次である。

I	私の思い描く教員像、学校像、子ども像(入学時)
II	学修を振り返る
III	授業科目を横断的視点から振り返る
IV	教師力向上実習Ⅰ～Ⅲについて
V	理想とする児童生徒像・教師像および自己課題(2年1月)
VI	「実践的指導力」のガイドライン（到達目標）
VII	学校サポーター ・実習記録
VIII	教師力向上実習Ⅰ・・・学級経営力と人間性育成 ・計画書 ・実習記録 ・報告書 ・学習シート、資料
IX	教師力向上実習Ⅱ・・・授業力向上とカリキュラム開発 ・計画書 ・実習記録 ・報告書 ・学習シート、資料
X	教師力向上実習Ⅲ・・・同僚性・共同的学校経営、教師力の確認 ・計画書 ・実習記録 ・報告書 ・学習シート、資料
XI	特別課題実習・・・現代的教育課題への対応力 ・計画書 ・実習記録 ・報告書 ・授業案
XII	多様なフィールド実習 ・計画書・実習記録・報告書
XIII	大学院の講義での学びの記録—レポート課題—

5. 学級づくり実践—互いに認め合える学級を目指して—

実践テーマ

自分と友だちを、互いに認め合える学級づくり—日本の伝統文化に関するスピーチ活動を通して—

（1）生徒の実態と実践のねらい

①生徒の実態

対象は豊橋市立青陵中学校2年（6月）の生徒である。運動が得意な生徒や本を読む生徒が多く、楽しそうに自分の興味がある本やスポーツについて語り合う姿も見られる。一方で、普段の会話の中で「私にはいいところないよ」と言う生徒や自分に自信がない生徒など、自己肯定感が低い生徒の姿が見られる。生活日記に「もっと友だちのよさを見つけていきたい」という思いを書いてくる生徒もいた。

そのため本実践では、論理的なスピーチ活動を通して互いの「よさ」を見つけ、認め合い、自己肯定感を高めていけるような生徒たちを育てていきたいと考えた。

②実践のねらい

スピーチ活動では、①情報を「正確に」聞き取る（メモする）ための「聞く力」や分かりやすく相手にスピーチを伝えるための「話す力」と②スピーチの交流を通して、友だちの「新たな一面」に気づき、「よさ」を伝え合う力を育てていきたいと考えた。

スピーチのテーマは「日本の伝統文化」に設定したことで、身近な伝統文化について見つめ直し、知識を深めさせていきたいと考えた。

③つけるべき言語力と伝統文化理解

今回は、「聞く・話す力の育成」と「伝統文化の理解」を軸にした、「習得」から「活用」までの学習段階を【表1】のように設定した（注5）。

【表1】「聞く・話す力」「伝統文化理解」の習得・活用

学習過程	つけるべき言語力 —到達目標(評価基準)—	伝統文化の理解 到達目標(評価基準)
習得	聞く力—正確に聞く— ①良い姿勢で、相手の方を見て聞くことができる(聞く態度)。 ②キーワード(5W1H, 固有名詞, 数字)に注目して聞き取り, メモすることができる。 ③発表者が一番伝えたいことを, 内容+判断のキーワードでメモすることができる。	①身近な自国の伝統文化の由来や歴史, 込められた願い等を理解することができる。 ②他国の伝統文化の存在に気付き, 興味を持つことができる。 ③自国の伝統文化と異文化を比較し, 「共通点」や「相違点」を理解することができる。
	話す力—論理的に話す— ①相手に伝わる話し方(声の大きさ, 速さ, 目線や表情の工夫)をすることができる。 ②伝えたいことを, 論理的な文章構成で組み立てることができる。	
活用	聞く力—自分の考えをもち, 発信するために聞く— ①新しい発見, すごい・真似したいと思ったところ, 質問・疑問に思ったことを具体的に指摘することができる。 ②友だちのスピーチの「よさ」が分かる。 話す力—相手や条件に応じて話す— ①与えられた時間の中で, 伝えたいことを効果的に伝えることができる。 ②非言語情報(写真, 絵, グラフ等)を効果的に取り入れることができる。	①自国の伝統文化に関するエピソードを語るすることができる。 ②自国の伝統文化の「よさ」に気付き, 発信することができる。 ③異文化の「ちがい」を受容し, 他国の「よさ」に結び付けることができる。

(2) 指導の流れとポイント

今回は、行事等の学校の実情により、「身近な日本の伝統文化について知る」という「習得」段階の授業を1時間と朝の会を活用した「異文化紹介・発見コーナー」を常時活動として行った。スピーチを書かせるためには、「自国の伝統文化」を理解する必要がある。そのため、「伝統文化の理解」の「習得」の学習段階を実践させていただいた。

①異文化紹介・発見コーナー(常時活動)【習得】

異文化を紹介・発見する「世界の果てまでイッテK」というコーナーを朝の会で実施した。私が留学中に撮った写真を提示しながら、海外の文化と日本の伝統文化の「ちがい」と「似ているところ」を紹介した。生徒たちには毎回「一言感想シート」に分かったことや考えたことを書かせ、教師が朱書きを入れて返すようにした。

②日本文化「すもう」を海外の人に紹介しよう

—自国の伝統文化への興味付け—【習得】

研究授業前日の朝の会では、ALTの先生が「す

もうについて教えて」と頼んできたという場面を設定し、すもうについて知っていることを箇条書きで書き出す時間を設けた。生徒たちは力士の特徴(体型や髪型など)やスポーツの特徴(勝敗の付け方や土俵など)を書くことができていた。

次に当日の朝の会では、「すもう」についてイメージの持てないALTに対して、すもうの絵を描く活動を行った。生徒たちは「すもう」の絵に苦戦しながらも、力士が土俵の上で取り組みあっている姿や力士の特徴を捉えた絵を描くことができていた。

③自国の伝統文化の再発見・見つめ直し【習得】

ア、自国の伝統文化の歴史を知る

生徒の「すもう」の絵の中から、より特徴を捉えている作品を黒板に貼り、授業の導入で興味付けのために使用した。そして、朱書きを入れた学習シートを基に、「すもう」の特徴を挙げさせた。

次に、ALTからの「すもう」に関する質問(なぜ塩をまくのか、なぜ裸なのか等)を投げ掛け、「知っているようで実は日本の伝統文化について知らない」という体験をさせた。

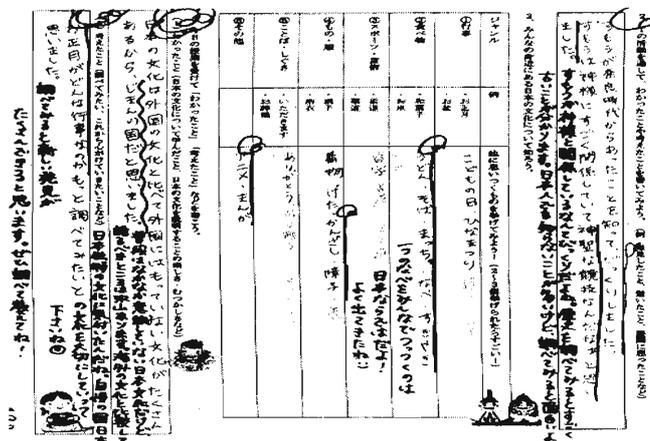
その後、教師がすもうの歴史や由来について説明し、生徒たちにはキーワードをメモさせた。説明が難しいところがあり、内容量も多かったのだが、キーワードを正確にメモできている生徒が多かった。感想を書かせることで、新たに発見したことや疑問に感じたこと等を書くことができていた。

イ、身近な伝統文化を探し、見つめ直す

身近にある自国の伝統文化のリストを作成させ、伝統文化に意識を向けさせる活動を行った。知っている日本の伝統文化を沢山書いている生徒もおり、積極的に手を挙げる生徒の数も多かった。

そして、授業の最後には「分かったこと」や「考えたこと」を書かせ、交流させた。日本文化の「よさ」に気付き、「日本文化をもっと知りたい」と日本の伝統文化に興味を持つ生徒たちの姿が見られた。

【資料1】日本の伝統文化に興味を持った生徒の学習シート



④日本文化について調べてみよう【習得】

生徒たちが興味を持った日本文化について調べることができるよう、「調べてシート」を作成し、司書教諭と日本の伝統文化に関する本を選び、学級に置いた。「端午の節句」について調べてきた生徒がいたので、朝の会で紹介した。

【日本の伝統文化を調べるポイント】

- ①いつ頃から・どこで始まったのか。(歴史・由来)
- ②目的・願いや祈り(こめられたメッセージ)は何か。
- ③日にち・時期・季節はいつか、そのわけは。
- ④何をやるものか。どんなものか。

⑤教師によるモデルスピーチ【習得から活用へ】

本実践では行うことができなかったが、スピーチ原稿を書かせる際、教師のモデルスピーチを提示する予定であった。モデルスピーチは、「はじめ・なか・まとめ・むすび」で構成し、「家族の愛情を感じる日ー私が紹介したい日本の文化 ひな祭りー」というテーマで作成していた。

今回は、生徒たちの家庭の事情を考慮し、モデルスピーチを読まなかった。しかし、自国の伝統文化への興味付けとして、朝の会で「ひな祭り」の由来や込められている願い、過ごし方を紹介した。

【公的な構成の「型」】

- ・はじめ…テーマ紹介
- ・なか1…選んだ文化の説明(日にち、目的、由来と歴史など)
- ・なか2…エピソード(その文化を選んだ理由、その文化に関する思い出など)
- ・まとめ…自分の思いや考えのまとめ
- ・むすび…これからの思い・心掛けたいこと

(3) 実践の成果と今後の課題

今回は、スピーチ活動のテーマである「自国の伝統文化」を理解するための習得学習しかできなかったため、その中の成果と課題を述べる。

①実践の成果

ア、異文化や英語という言語への興味付けができたー他国の「よさ」発見ー

海外の文化を知ることによって「挨拶って国によっていろいろで面白い」「海外に行ってみたい」と他国の文化の「よさ」を発見し、海外に興味を持つ生徒の姿が見られた。また、英語で話しかけてくる生徒や英語で日記を書いてくる生徒など、1ヶ月の実習を通して英語に興味を持った生徒もいた。異文化理解を通して、海外の文化だけではなく、英語にも興味を持たせることができた。

イ、日本の伝統文化への興味付けができたー身近な日本の伝統文化の「よさ」発見ー

身近な日本の伝統文化の由来や歴史を知り、見つめ直すことで「意外と知らないことが多い」ことに

気づき、「日本文化を伝えたり体験してみたい」と日本の伝統文化に興味を持つ生徒の姿が見られた。

また、「日本は小さな国だが世界に広まった文化が多くある」「異文化紹介コーナーで海外のことについて知っているけど、日本の文化もすごくいいなあと思った」と書く生徒の姿も見られ、授業を通して日本の伝統文化の「よさ」に気付かせることもできた。

ウ、自国と他国の「よさ」発見のきっかけづくりー自国の伝統文化理解と異文化理解の相互性ー

自国の伝統文化と異文化の両方を取り上げることで、「共通点」や「相違点」を見つけ、「海外の文化をもっと知りたい」「日本ではどうか」と疑問を抱く生徒たちの姿が見られた。両者を比較しながら見ていくことで、自国と他国の「よさ」に気付かせる「きっかけ」を与えることができたと考えられる。

②今後の課題

ア、意見を言い合える人間関係・学級をつくる

授業中、しっかりとシートに自分の考えを書いても、発表する時に書いてあることを全部言わない生徒の姿が見られた。「どんな意見を言っても受け入れてもらえる」という人間関係や学級づくりの大切さを改めて痛感した。生徒たちが堂々と自分の意見を言うためには、生徒たちに「聞く・話す力」の育成や自己肯定感を高めるような声掛けや指導が必要である。学級経営を授業の中でも生かしていけるよう、「意見を言い合える人間関係」を学級の中で築いていきたい。

イ、生徒たちのニーズに合った題材選びの必要性

今回は「すもう」を題材として取り上げた。意図としては、①世界にも通ずる国技であること、②どの生徒も一度はすもうを目にしたことがあり、イメージが沸きやすい題材であった。しかし、生徒たちはすもうをイメージできるものの、身近なスポーツではなかったため「なんですすもうなの?」という声が上がってしまった。また「他の日本の文化についてやりたかった」という感想もあった。

生徒のニーズに合った教材を選ぶためには、事前にアンケートをとるなどし、生徒たちの興味やニーズを把握しておく必要があった。今後、生徒たちの興味やニーズに合った教材を準備・精選していけるよう、「生徒たちの声」を大切にしていきたい。

6. 授業づくり実践

実践テーマ

論理的なスピーチ活動における

「習得・活用」の英語科授業開発

ー接続詞を活用した「行ってみたい国・県スピーチ」を例にー

(1) 生徒の実態と実践のねらい

①生徒の実態

対象は豊橋市立青陵中学校2年(11月)の生徒で

ある。比較的英語の文法問題を得意としている生徒が多いため、授業中は積極的に発言し、活発に活動する姿が見られる。しかし、文法を「覚えるもの」として捉えており、「自己表現の中で生かしていこう」という視点を持っていないように感じる。本実践では、接続詞を用いて自分の考えを英語で論理的に相手に伝える力を育てていきたいと考えた。

②実践のねらい

本実践では、接続詞という文法事項を、論理的文章を構成する軸として位置づけた。接続詞を自己表現の中に取り入れることで、「自分の考え」を順序立てて伝えたり、「理由・根拠」を持たせたりすることができる。今回は、接続詞を活用した論理的文章を書く・話す過程を通して、生徒たちに「思考する型」や自分らしく書く（具体例を「判断する力」）、それを「表現する力」を育てたいと考えた。

また、文法の構造を理解することは、英語圏に暮らす人たちの思考の型や英語の歴史的背景、文化を学ぶことである。本実践では、母語や自国の伝統文化と比較しながら指導することで、言語や文化に対する関心を高め、伝統文化に対して考えを深めさせることができると考えた。

(2) つけるべき言語力—英語科の習得・活用—

今回は、生徒たち全員が楽しく論理的文章の原稿が書けるよう、「習得」から「活用」への学習過程と各段階でつけるべき言語力を【表2（次ページ）】のように捉え、単元を構成した（注5）。

論理的文章の「習得」の学習段階では、「接続詞の構造・意味の理解する力」を、「活用」の学習段階では「論理的文章を書く力」を身につけさせ、「習得」「活用」の学習過程を明確にした論理的文章のスピーチ活動の授業開発を行った。

(3) 指導の流れとポイント

生徒たちは教科書 New Horizon2（東京書籍）の Unit5 “A Park or a Parking Area?” の単元で接続詞(because, when, that, if)の「習得学習」を終えていた。そのため本実践では、「活用学習」として接続詞を軸とした論理的文章のスピーチ活動を行った。

①毎時 異文化紹介・発見コーナー

英語の授業を通して異文化理解および自国の伝統文化理解に繋げていくために、毎時間「異文化紹介クイズ」のコーナーを設けた。そこでは、英語で4つのヒント(国旗の色、有名なもの、行事、食べられているもの)を出し、「どこの国・県出身か」を当てるクイズを行なった。解説では、写真や絵を活用しながら日本の伝統文化と比較し、異文化との共通点・相違点に触れた。また、一言感想シートには分かったことや考えたことを書かせ、教師が朱書きを入れて毎時返却した。生徒たちからは、朱書きを嬉しそうに読み、意欲的に異文化クイズに参加する姿が

見られた。

②第1時 スピーチの書き方の型を学ぶ/

接続詞becauseの習得・活用【活用型学習1】

ア、論理的文章のスピーチの書き方の型を学ぶ

授業の見通しを持たせるために、英語における論理的文章のスピーチの書き方の型を提示した。教科書で学習・習得した接続詞because, when, that, ifを自己表現の中でどのように活用していくかを示し、スピーチを書くためのステップを押さえた。

イ、スピーチのテーマとなる国・県を選ぶ

教師が作成した10カ国の観光パンフレットを基に、自分の行ってみたい国を選ばせた。生徒たちに自ら選ばせることで時間はかかるが、スピーチ活動への意欲を高めることができた。また「海外ではなく日本の県を選びたい」という意見もあり、県をスピーチテーマに選ぶ生徒もいた。

ウ、接続詞becauseの構造と意味を学び、選んだ理由を書く

接続詞becauseの構造と意味を説明後、確認問題を解かせた。確認問題ではbecauseの後に理由がくることに注目させた。英語では初めに言いたことを示してから、その後に理由・根拠を示すため、日本語とは異なる。文法指導を通して、英語圏に暮らす人々の思考の型や日本語との発想の違いも押さえた。その後、その国・県を選んだ理由を書かせた。

③第2時 接続詞whenの習得・活用【活用型学習2】

ア、接続詞whenの構造と意味を学ぶ

接続詞whenの構造と意味理解では、接続詞が文頭に来るときのカンマや三人称単数のs、時制に気をつけるよう指導した。穴埋め問題では、中学1年生レベルの文を接続詞whenで繋いだシンプルな文を提示した。日本語訳を載せておくことで、母語を参考にしながら下線部に入る単語を推測する姿が見られた。そして英文は全て生徒たちの知っている先生へのインタビューを基に作成したため、解説後に「どの先生の一言か」を考えさせた。

イ、接続詞whenを用いてやってみたいことを書く

接続詞whenを用いて、観光パンフレットを基に選んだ国や県でやってみたいことを書かせた。また、学習シートには文の書き出しや接続詞を使う位置を記しておいた。おすすめの動詞やwhenを使った文の観点も参考にさせながら、やってみたいこととその理由・根拠を書かせた。

④第3時 接続詞that/ifの習得・活用【活用型学習3】

ア、接続詞thatの構造と意味を学ぶ

接続詞thatの説明では、中学1年時の既習表現

【表2】英語科における「習得」から「活用」の学習過程と、各段階でつけるべき言語力

学習過程・段階	各学習段階でつけるべき言語力	本単元における評価基準（到達目標）
習得型学習	基礎学習 （習得型学習1） ⇒他の教科にも関連する力	①単語の意味を理解できる。 ②英語のリズムや強勢を意識しながら、正確に音読できる。 ③国名や県名を正確に書き写すことができる。
	基本学習 （習得型学習2） ⇒英語科特有の言語力	④接続詞（because, that, when, if）の文構造や意味をコミュニケーションに生かす立場から理解できる。 ⑤他国と自国の伝統文化を比較しながら、「共通点」や「相違点」、「疑問・質問」などが書ける。 ⑥教師のモデルスピーチを聞いて、「論理的なスピーチの型」を理解できる。
活用型学習	発展的学習 （活用型学習1） ⇒「自分の考え」を持つ、適切な表現の選択・活用する力	⑦英語版「はじめ・なか・まとめ・むすび」の構成で書ける。 ⑧「行ってみたい国や県」を選んだ理由や「やってみたいこと」の条件等を、接続詞を効果的に用いて書ける。
	発展学習 （活用型学習2） ⇒論理的に伝え合う（聞く・話す・書く）、読み解く力	⑨声の大きさ、速さ、目線、イントネーション等を意識しながら、分かりやすく豊かなスピーチができる。 ⑩友だちやその国・県の「よさ」や「もっと知りたいこと」を互いに伝え合うことができる。
評価・一般化	評価・一般化学習 ⇒学びの一般化、経験や生活に生かす	⑪学習を振り返り自己評価できる。 ⑫各教科の学習や人間関係の中で生かせる。 ⑬新たな課題を見つけ、意欲的に解決できる。

である代名詞のthat同様「指し示す・導く」イメージがあることを教えた。指示棒を使いながら、「指し示す」という動作を実際に見せ、視覚的に分かりやすく伝えるよう工夫した。そして、「thatは考えや願いを導く案内人だけど、恥ずかしがり屋だから省略されるよ」と説明し、文法を分かりやすい言葉に置き換えて理解させた。

イ、接続詞thatを用いてその国や県について知っていることを書く

教師が例文を示し、「その国や県について知っていること」を書くときの観点を注に示しておいた。また、自己表現する際に役立つ動詞や形容詞をまとめた資料を配り、それを参考にしながら書かせた。なかなか書き出せない生徒には、「その国で有名なもの」を観光パンフレットの中から選ばせ、it is famous for～という表現を用いて書くよう指導した。書き出しを与えると、その後続く文を自ら考え、文を完成させることができていた。

ウ、接続詞ifの構造と意味を学び、スピーチの最後の一文を書く

接続詞ifの構造と意味を例文で説明した。確認問題では、英文の誤りを説明させる問いを設定し、文法の本質的な構造・意味理解に繋げた。また、英文がどの先生の一言かを考えさせることで、生徒たちは自ら英文を訳していた。その後、スピーチのまとめの部分にあたる最後の一文を書かせた。

⑤第4時スピーチ原稿を書く【活用型学習4】

ア、教師のモデルスピーチを聞く

スピーチ原稿を書かせる前に、教師のモデルスピーチを聞かせた。スピーチを聞く時の観点を3つ（どこの国か、選んだ理由、やってみたいことは何か）与え、キーワードをメモさせた。また、スピーチする際、声の大きさ、速さ、強勢やイントネーションなどに気をつけ、生徒たちがスピーチを行っていく際の手本になるよう心掛けた。

イ、スピーチ原稿を書く

「Introduction(はじめ), Body(なか), Conclusion(まとめ), Closing(むすび)」の構成で、6文程度で書けるような原稿シートを作成し、接続詞を活用した論理的な英語のスピーチ原稿を書かせた。4つのパラグラフ(論理的な思考の単位)で構成することで、話し手は伝えたい事柄をはっきりさせることができ、聞き手にも大切なことが伝わりやすくなると教えた。また、原稿シートは、これまでの学習シートで書いてきた文を繋げると完成する構成になっているので、今までの学習シートを参考にしよう伝えた。加えて、英語を得意とする生徒には応用編を用意し、英文を書き加えられるよう工夫した。

- ・はじめ: ①行きたい国・県とその理由 (because)
②その国・県について知っていること (that)
 - ・なか: やってみたいこととその理由 (when, because)
※応用編は1文付け加え、やってみたいことを詳しく説明
 - ・まとめ: 自分の思いや願い (if) ※応用編は質問を加える
 - ・むすび: しめくくりの挨拶
- ※ () 内の接続詞を使うことを条件とした。

【資料2】 接続詞を活用した論理的で個性的なスピーチ原稿を書くための学習シート

Section	Instructions	Student's Work
Theme (テーマ)	①行きたい国・県とその理由 (because) ②その国・県について知っていること (that)	Noble country ~ the United Kingdom ~ (Country)
Introduction (はじめ)	①行きたい国・県とその理由 (because) ②知っていること (that)	I want to go to the United Kingdom because I want to go to the Buckingham Palace. I'm sure that London is the beautiful.
Body (なか)	①やってみたいこととその理由 (when, because) ②その理由 (because)	And I want to drink a bottle of wine when I'm thirsty. Beer or I hope that. It's so good. I think that wine is better than beer. I will go there if I become a statesman.
Conclusion (まとめ)	自分の思いや願い (if)	Why don't you come to the United Kingdom with me?
Closing (おわり)	しめくくりの挨拶	Thank you very much

Excellent!!!
このスピーチ、すごく楽しさを覚えることになりました。原稿だけじゃなく、スピーチも聞きたかったです!! レベル高いし、面白いので実現させて!!

(4) 実践の成果と課題
①実践の成果

ア、文法を覚えるレベルから論理的なコミュニケーションのレベルへ—英語の授業としての新しさ—

本実践では、学習指導要領の新課程を踏まえ、文法をコミュニケーションの中で生かす視点から、論理的な文章の書き方を指導することができた。文法を覚えるだけでなく、「習得」した接続詞を論理

的なスピーチの中で生かしながら、子どもたちはスピーチ原稿を書くことができていた。本実践を通して、文法を自己表現の中で生かす視点を子どもたちに与えることができたと考えられる。

イ、世界の国や異文化理解から自国の伝統文化理解へ
異文化クイズの感想から以下の記述があった。

- アメリカのサンクスギビングデイは、すごく盛り上がっているなと思った。アメリカに行きたいなと思った。(女)
- ヨーロッパは文化的な建物がきれいで、日本はわびさびがあると思った。(男)
- いろいろな国のジェスチャーを調べたい。(男)
- 日本の国旗の意味も調べたい。(女)

異文化や自国の文化・伝統との相違点を発見し、そのことに面白さを感じる生徒の姿が見られた。中には、日本や海外の「よさ」に気付くことができた生徒や異文化や自国の伝統文化に疑問を抱いた生徒もいた。異文化理解から自国の伝統文化理解へ繋げることができたと考えられる。

ウ、学習シートや自作資料の有効性
—楽しく全員に学力を身につけさせる教材開発—

今回は接続詞を用いたスピーチを段階的に書けるような学習シートを作成した。スピーチを書くステップや接続詞のポイントを示すことで、「スピーチは苦手だけど、私でも書けそう」「テスト前に先生の学習シートが役立ったよ」という感想を引き出すことができた。このことから、学習シートは、授業の見通しや学習の振り返りができるように作成する必要があると学んだ。

また資料の観光パンフレットでは、地名や固有名詞を日本語と英語で表記し、スピーチの中で使えるような表現を載せた。生徒たちはパンフレットの情報をスピーチの中に反映させながら、スピーチ原稿を書くことができていた。このことから、資料は視覚的に分かりやすく、学習を支援する視点で作成することが大切だと学んだ。

エ、「その子らしさ」や生活経験が表われたスピーチ
生徒たちのスピーチ原稿に以下の記述があった。

- i) I want to go to the United States because I like basketball. I know that it is famous for NBA.
(男・バスケ部)
- ii) I want to meet my friends when I go to Toledo. Because I want to talk with my friends.
(女・留学経験あり)

スピーチには、その子が何に興味があり、どのような生活経験があるのかが表われる。好きなスポーツや部活に力を入れている生徒、留学経験のある生徒、将来の夢について書く生徒など、スピーチ原稿

の中から「そのらしさ」を読み取ることができた。

②今後の課題

ア、生徒たちの実態・レベルに合った学習シートの開発の必要性

今回のスピーチ原稿は、授業で扱った学習シートに書いた英文を書き写せば完成するような構成になっていた。しかし、英語を苦手とする生徒にとっては、書き出しが書かれていない原稿シートは難しかったように感じる。生徒たちのレベルに合わせて学習シートを選べるよう、学習シートのレベルをいくつか用意しておく必要があった。今後、生徒たちの実態やレベルに合った学習シート開発を行っていきけるようになりたい。

イ、授業統率力を高める必要性

今回の実習では、授業時間内に学習活動がおさまらないことがあった。授業を延長せず、時間内で終わらせることは、授業を構成していく上で必要不可欠な力である。1時間の中で力を入れるところ、すっきりやるところを理解しておく必要があった。また、授業を延長することで、生徒たちの学習意欲低下に繋がることもある。今後は、学習の「ねらい」を明確にし、学習内容を精選するなど、時間に余裕を持って授業を組み立てていきたい。

ウ、振り返りから授業をつくることの大切さ

授業の最後に、学習の振り返りとして学習課題に対する自己評価と「今日の授業で分かったこと」「考えたこと」を書かせる学習シートを作成した。しかし、授業の中で振り返りの時間をとることができず、活用することができなかつた。生徒たちに「この授業で何を学んだのか、どんな力がついたのか」を把握させ、学習意欲を高めるためにも必要な手立てであった。今後は自らの振り返りだけではなく、生徒たちの振り返りから授業をつくっていく視点も大切にしていきたい。

7. 2つの実習を通して学んだこと

—学級づくりと授業づくりの関連性とは—

(1)「論理的なコミュニケーション能力」を英語科から他教科・領域へ（一般化の視点）

今回英語科の授業では、全教科・活動・コミュニケーション等に生きる「はじめ・なか・まとめ・むすび」の公的な構成の型を基に構成した原稿シートを活用した。今回は接続詞の文法指導と公的な構成の「型」の学習を関連させたことで、「まとまった英文を書くのが苦手だな」と言っていた生徒も、接続詞を活用した5文程度のスピーチを書き上げ、「分かりやすいスピーチの書き方が分かった」という感想を引き出すことができた。このことから、英語科においても「論理的なコミュニケーション能力」を育てるためには、公的な構成の型や文法の指

導は有効であったと考えられる。そして、英語科で育成した論理的なコミュニケーション能力を、他教科や生活の中で生かしていけるような一般化の視点を持ち、授業・単元構成を立てていくことの大切さを学んだ。

(2) 日本人としてのアイデンティティーを育てる —異文化理解と自国の伝統文化理解を通して—

2つの実習で行った「異文化紹介・発見コーナー」を通して、英語という言語や異文化理解を深めていくためには、自国の伝統文化理解が基盤となることが分かった。

本実践では、学級の常時活動で自国の伝統文化理解の学習を行い、英語の授業では異文化クイズから他国の伝統文化を知る活動を行った。異文化と自国の伝統文化を比較することで、文化の多様性や価値の多様性、自国や他国の「よさ」の発見に繋げていくことができる。今後、日本人としてのアイデンティティーを育み、自国の「よさ」を発信してけるような学級・授業づくりを行っていきたい。

(3) 授業づくりと学級づくりの相互性・一貫性

実習を通して、授業づくりと学級づくりは表裏一体の関係であることが分かった。授業中、生徒たちが活発に意見を出し合うためには、「安心して発表できる」という学級の基盤が必要不可欠である。

また、「学習規律」を学級と授業の中で身に付けさせるためには、一貫性のある指導が大切である。授業の秩序を保持し、学級の友だちと学び合いたいという学習意欲を引き出すためにも、「学習規律」を授業と学級づくりの両面から育てていきたい。

8. 教職大学院の2年間で学んだこと8項目

(1) 学級づくりの観点から

①一人一人が活躍できる・居場所のある学級づくり

学級において、自らの存在意義を生徒たちが見出せるよう、先生方は必ず生徒たちに一人一役与えるよう工夫されていた。学級が上手く機能していくためには、一人一人が責任を持って役割を遂行していく必要があり、その中で「学級で自分は必要とされているんだ」という自己有用感を高めることができる。私は、係り活動や日直、給食などの当番活動からも、自己存在感や自己有用感を高めたいような指導をしていきたい。

②「命令」ではなく「考えさせる指導」の大切さ

生徒たちを指導する際、「～しなさい」と命令して従わせるのではなく、「なぜいけないのか？」を自分自身で考えさせ、行動の自己決定をさせていくことが大切だと学んだ。そのため、教師が指導の意味付けをし、生徒たちが自ら行動を見直していけるよう仕向けていく必要がある。そして、生徒たちが「なぜか」を納得した上で行動することで、自己責任が

生まれ、反発を防ぐことができる。指導する際、命令ではなく、生徒たちに考えさせるような指導や声掛けを心掛けていきたい。

③「自分の教室」と自覚できるような環境づくり —生活・学習の基盤づくりの大切さ—

生徒たちが安全に楽しく学校生活をおくるためには、「ほっ」とでき、自分の「居場所」を見つけられるような環境づくりが大切である。そのために先生方は、写真や体育祭の旗など、生徒の思い出に残るものを掲示し、生徒たちが「自分の教室」であることを自覚できるように工夫されていた。

また、観葉植物が枯れる、写真の傷、放課後の机の乱れなどから、現在の学級や生徒たちの状態を把握することができるかと教えていただいた。

このことから、生徒たちが安心して過ごせるような学級環境づくりを大切に、学級環境の状態からも生徒や学級の状態を把握していきたい。

(2) 授業づくりの観点から

①思考力・判断力・表現力等の「活用力」育成 —「習得」と「活用」の学習過程の明確化—

英語の授業を単にコミュニケーション活動の場としてではなく、思考・判断・表現力等の「活用力」を育み、互いの考えを伝え合うという観点から授業開発をしていくことが大切だと学んだ。コミュニケーションを支えるものとして文法を捉え、生徒たちが自分の考えを持ち、伝え合えるような「習得」と「活用」の学習過程を明確にした授業づくりを行ってきたい。

②教師が教えるべきことは躊躇せず全員に教える —「習得型学習」の教育観・指導観の明確化—

生徒たちは、いきなり相互交流や伝え合いといった発展的な学習を行うことは難しい。全員が「豊かな学び合いや伝え合い・交流」に参加するためには、「基礎・基本学力（習得型学力）」を全員に身に付けさせておく必要があると学んだ。そのために、英語科における「習得型学習」の指導過程を明確にし、教えるべき部分は躊躇せず、全員に楽しく教えていきたい。

③到達目標、評価基準を明確にしたカリキュラムを

カリキュラム・授業開発において、「どんな学力を身に付けさせ、どこをどう評価するか」を明確にすることが大切だと学んだ。最終ゴールには必ず「教師の思い」があり、それを具現化していくためのステップとして「授業づくり」がある。最終ゴールとしての評価から「習得・活用、言語活動」を位置づけ、ぶれない指導をしていきたい。

(3) 組織的な学校運営の観点から

①問題行動（生徒のSOS）の原因見極めの大切さ

生徒たちが問題行動を起こす背景は一人一人異なる。

。「原因」を見極めることで、個に応じた適切な指導をすることができるかと学んだ。そして、そのためには日ごろから正確に生徒たちを理解し、生徒たちの生活基盤である「家族」を理解しておく必要がある。生徒理解を深め、問題を正しく見極めるためにも、事前に家族関係図（兄弟・祖父母関係や保護者の職業など）を作成し、備えていきたい。

また、問題行動は生徒たちのSOSのサインである。指導する際、生徒たちの言い分を聞き、行動の裏にある生徒たちの「訴え」に耳を傾け、「どうしたいのか」を生徒自身に考えさせていくことが大切だと学んだ。そして、ベテランの先生や養護の先生方にも相談し、組織的な協力体制のもと、正確な問題認識や一貫性のある指導を行っていきたい。

②報告・連絡・相談を徹底することの大切さ —教師・学年・学校間や関係機関との連携—

学校組織の中では「公的説明」を果たすために、校務分掌として教師一人一人にそれぞれの役割が与えられている。中学校では学年単位で動くことが多いため、学年内にも役割がある。これは、学校・学級経営を円滑に進めていくためには必要不可欠である。そして、校務分掌を機能させるためには、教師・学年間で「報告・連絡・相談」を徹底することが大切だと学んだ。生徒たちを「守る」体制を作るために、報告・連絡・相談を徹底していきたい。

また、時には学校で全ての問題を抱え込まず、様々な機関（児童相談所など）と連携を図っていくことも大切だと学んだ。

9. おわりに—「教職」に対する熱い情熱を胸に—

来年度からは、豊橋市内の公立中学校で、英語の教師として勤務させていただくことになっている。4月から、教職大学院や多くの実習で学んだことを生かしていけるよう努めていきたい。

①互いの「よさ」を伝え合える子どもたちを —「ちがいの受容から「その子らしさ」発見へ—

学級には、様々な個性を持つ子どもたちがいる。その中でよりよい人間関係を築いていくには、互いの「ちがいを」受け入れ、「その子らしさ」として捉え直していく必要がある。そのために、私は異文化や自国の伝統文化理解を通して、「ちがいを」共感的に理解し、相互の立場を尊重し合う態度を育てていくことも大切だと考えている。授業と学級活動をリンクさせながら、互いの「よさ」を発信し合えるような子どもたちを育てていきたい。

②全員が「楽しくわかる」英語科授業づくり —言葉や伝統文化の「面白さ」に気づける授業を—

英語という教科は、苦手な生徒と得意な生徒が二極化しやすい。私は、英語を苦手とする生徒たちこそ授業の中で取り上げ、主役にしていきたいと考え

ている。彼らの「つまずき」は、授業づくりにおいて大切な視点となる。生徒たち全員に学力をしっかりと保証していけるよう、英語科授業のゴールを明確にもち、授業開発力や指導力を磨き、常に進歩し続ける教師でありたい。

また、私は英語の「魅力」を授業の中で語っていききたい。留学の経験を踏まえながら、①英語でコミュニケーションをとることの難しさや伝えられないもどかしさ・その先にある面白さ、②異文化を知ることの魅力や自国の伝統文化を「発信」することの喜びを授業の中で伝えていきたい。

③子どもたちが「頼りたい」と思える教師を目指して — 日常会話の中から信頼関係づくりを —

教師は、「子どもたちが頼れる大人であること」が大切だと学んだ。子どもたちは対人関係や家族関係、勉強、部活など、多様な悩みを抱えている。私は、悩みを抱える子どもが「頼りたい」と思えるような身近な大人を目指し、彼らをサポートしていきたくて考えている。そのためには、4月からちょっとした時間を見つけては子どもたちに話し掛け、子どもたちの懐に入れてもらう必要がある。そして、自分から話しかけてこない子にも「先生は見ていますよ」というメッセージを送り続け、気にかけていくことが大切である。子どもたちとの信頼関係を築くために、日頃からの声かけや真摯に向き合う姿勢を心がけ、「この先生には話してみようかな」と思ってもらえるような教師を目指していきたい。

【注記】

注1 『学校教育法』第21条10項目、第30条第2項（2007年6月一部改定）

注2 『中学校学習指導要領解説外国語編』（文部科学省2008年9月）

注3 佐藤洋一「学校全体で取り組む『言語活動の充実』、何が実践課題か？—新課程実施に向けた『言語力』育成・授業開発、カリキュラム開発と重点化—」（『平成22年度愛知県三河教育研究会・事例集（言語活動の充実）』三河教育研究会調査委員会2011年3月）

注4 同編著『国語科「習得・活用型学力」の開発と授業モデル 1～4』（明治図書2011年10月）

注5 佐藤洋一先生の学習過程論を基に匿名が作成した。

【参考文献】

1、新学習指導要領関係

『小学校学習指導要領解説総則編』（文部科学省2008年8月）、『中学校学習指導要領解説総則編』（同2008年9月）、『小学校学習指導要領解説外国語活動編』（同2008年8月）、中央教育審議会答申「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（同2010年3月）、同「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学種指導要領の改善について」（同2008年1月）、無藤隆・月刊『悠+』編集部『速解 新しい指導要録とこれからの評価＜平成22年改訂＞』（ぎょうせい2010年6月）

2、英語科授業づくりに関わる文献

(1)直山木綿子編・著『小学校新学習指導要領の授業 外国語活動実践事例集Ⅰ・Ⅱ』（小学館2009年4月）、同編集『小学校外国語活動モデル事例集』（教育開発研究所2011年3月）、同・兼重昇『小学校新学習指

導要領の展開—外国語活動編—』（明治図書2008年12月）

(2)高橋美由紀・柳善和編著『新しい小学校英語科教育法』（協同出版2011年7月）、米山朝二『新編英語教育指導法事典』（研究社2011年8月）、影浦攻『改訂英語科新授業の実践モデル20』（明治図書2009年3月）

(3)佐藤洋一「教職大学院に求められる『実践的指導力』—『思考・判断・表現力等(活用力)』学習システムの開発—」（『日本教育大学協会研究集会』発表資料2011年10月）同『聞く力（メモ）』を育てる国語科の基礎・基本学習モデル—学校教育・全教科の基盤としての国語科『情報リテラシー』『コミュニケーション能力』の段階的な『授業・評価システム』の開発と実践—」（『平成18年度中学・高校「話す力・聞く力」を育てる国語科研修講座（山口県総合教育センター）（資料）』平成18年10月4日）

3、学級づくりに関わる文献

佐藤洋一「できる・発見・学びの共有と自覚化」（『授業研究21』明治図書2008年2月）、小島宏『失敗しない新任教師の「授業力」』（教育開発研究所2009年9月）

4、「伝統と文化」に関わる文献

(1)佐藤洋一「戦後教育の時代は終わった—伝統的な言語文化重視—」（『現代教育科学 特集・戦後の「教育論争」から何を学ぶか』（明治図書2011年11月）、『伝統的な言語文化』のテキスト形式を生かす』（『教育科学国語教育 特集・新年度計画が光る“新教科書研究のツボ”』（同2012年1月）、市毛勝雄編『伝統的な言語文化』を教える1～3』（同2009年8月）
(2)マイケル・スワン著・吉田正治訳『オックスフォード実例現代英語用法辞典改訂最新版』（研究社・オックスフォード大学出版局2000年9月）、川浦良枝『しばわんこの和のこころ』シリーズ（白泉社2002～2008年）、梅沢実監修『身近に学ぶ国際理解世界を知って日本を知ろう（全7巻）』（学習研究社2002年）、『江戸しぐさ』入門』（三五館2007年）、『日本の伝統文化・芸能事典』（汐文社2006年）

5、英語科教材開発に関わる文献

(1)中島洋一『英語のディベート授業30の技』（明治図書1997年8月）同『英語好きにする授業マネジメント30の技』（同2000年1月）、松本茂編著『生徒を変えるコミュニケーション活動—自己表現活動の留意点と進め方—』（教育出版1999年9月）、菅正隆『日本人の英語力—それを支える英語教育の現状—』（開隆堂2010年11月）同・室井美稚子『子どもにウケるとっておき英語クイズ70』（フォーラム・A2011年8月）、大西泰斗/ポール・マクベイ『ハートで感じる英文法—NHK3か月トピック英会話—』シリーズ（日本放送出版協会2005～2006年）
(2)田尻悟郎『英語授業改革論』（同2009年11月）、横溝紳一郎編著『生徒の心に火をつける』（同2010年5月）

【付記】 大学院2年間の実習は、①豊橋市立青陵中学校（中島健治校長先生）＜学校サポーター、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ＞、②豊田市立東保見小学校（新美隆一校長先生）＜特別課題実習＞、③豊橋市立豊城中学校（大林智校長先生）＜教師力向上実習Ⅲ＞で行なわせていただいた。尚、実習校におきましては、多くの先生方にご指導・ご助言をいただき、大変お世話になりました。ここではお一人ずつお名前をあげることはできませんが、お世話になった全ての先生方に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、学校サポーターでご指導して下さった蜂須賀渉先生、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱでご指導下さった佐藤洋一先生、白井正康先生、実習Ⅲでご指導して下さった添田久美子先生、そして支えてくれた友人に心から感謝を申し上げます。2年間、本当にありがとうございました。